

二股膏薬の思い出

中河伸俊（大阪府立大学・関西大学名誉教授）

日本ポピュラー音楽学会は、いまでも多分にそうだが創設期からとても間口が広く、研究者だけでなく評論家やライター、愛好家、音楽関連業種の人なども構成員になっており、そしてその傾向にはおそらく三井さんの人脈によって下支えされている面があった（中村とうよう氏や北中正和氏の入会がその例）。そもそも当初はこの国にポピュラー音楽プロパーの研究者は一握りしかいなかったから、それにはある種の必然性があった。しかしそれだけではなく、三井さんは一方で日本の PM 研究の質を国際レベルに高めていくことに心をくだきつつ、もう一方で、そのような幅広いメンバーシップのあり方を好んでおられた気がする。少なくとも私の場合、そんな方針の学会だと感じたからこそ JASPM に入ったのだった。最初の勤め先が富山だったので、ご近所のみで学会の北陸例会に顔を出し、三井さんともお付き合いさせていただくようになったのだが、じつは逸脱と社会問題の社会学が本籍の私にはキャリアを通じて PM 研究と呼べるような論文は2本しかない。一方で、『ザ・ブルース』誌や『(ニュー) ミュージック・マガジン』誌を皮切りに音楽雑誌に寄稿をしてきた内職ライターなので、三井さんは私にとってはまずもって、『マガジン』に毎月『新着洋書紹介』を寄稿する人であり、そして自分の趣味（北米のアフリカンアメリカンのポピュラー音楽）の分野で、本を書いたり関連する翻訳をしたりアルバムの解説を書いたり歌詞カード用に曲の聴き取りをしたりと八面六臂の活躍をしている人なのだった。

そしてそうしたお仕事ぶりが、私の三井さん像に微妙なアンビバレンスを招きこむことにもなった。私の内職ライターとしての歩みの出発点はシカゴのブルーズクラブでの日暮泰文さんとの出会いなのだが、日本にブルースという音楽ジャンルを定着させたキーパーソンとっていいその彼が（その足跡は日暮・高地編の『ニッポン人のブルース受容史』2023に詳しい）、三井さんの黒人音楽関係のアウトプットにきわめて批判的だった。その批判はほとんど憤りに近く、それに駆られて、二人が一緒に仕事をしたロバート・ジョンソンの『The Complete Recordings』の日本盤のブックレットでの三井さん担当の訳詞の「誤りを正す」ために、訳し直した全歌詞を収録した CD ブックを刊行しませんでした（『ロバート・

ジョンソンを読む』2011)。黒音楽愛好家の私には、日暮さんの言い分はよく分かる。専門のブルーグラスや英国のバラッドの研究に比べれば、三井さんのその他の分野での「商業的」なお仕事はときに精度と背景知識においてかなり見劣りがする。とはいえ、二股膏薬の私としては、日暮さんに対してはこう言いたい。三井さんはこの国でポピュラー音楽研究という分野がひとり立ちできるようにするのにとても大きな貢献をした人だし、それに、あなたはたしかにぼくらに何人もの伝説のブルーズマンを生で見せてくれたけど、三井さんはあの（あなたもその著書を訳した）ポール・オリヴァーをぼくらに生で見せてくれたんだよ（@1997年7月の金沢でのIASPM大会！）。

今月（23年12月）発行の音楽誌掲載の対訳記事のために、ビッグ・ビル・ブルーンジーの戦前録音、「Too Many Drivers」を聴き取りしなければいけなくなって、これが久々の難物だった。編集者に泣きを入れたら、資料として昔出た日本盤CDの歌詞カードをスキャンしたファイルを送ってくれた。クレジットを見ると、「Lyrics transcribed by Philo Biblon Co. and revised by TORU MITSUI」となっている。うわあ、さすがは超絶の英語力を誇る三井さん。音楽出版社から提供された歌詞を、録音に当たって耳で修正してるんだ。私には取れなかったここもあそこも、しっかり埋まっているぞ、脱帽！ところがですね。送ってもらった歌詞を見ながら繰り返し音を聴き直すと、三井さんが埋めた箇所はブルーンジーが歌っているのとかなり違う。ていうか、なまじ英語ができるから頭の中で作ってしまっているところがあるように見える。よし、同じ聴き取り業の後輩としての「恩返し」だ、がんばるぞ。というわけで粘り強く再生を繰り返し、脂汗をかいて、たぶん現時点では世界一正確なこの歌のトランスクリプションを仕上げた。こういうのは学恩とは言わないのかもしれないけど、先人の業は励みになる。あの三井さんの柔和な笑みが無性に懐かしい。